

## 『東京市政論』

チャールズ・A・ビーアド 著

東京市政調査会 [刊]

1923年12月 23cm/234頁 図書番号 OA-0050

チャールズ・A・ビーアド博士（以下、博士）は、1874年11月アメリカ合衆国のインディアナ州ナイツタウンに生まれた。オックスフォード大学留学後、コロンビア大学において経済学、政治学及び史学の研究を続け、教授としてアメリカ憲法発達史および政治学の教鞭をとった。

本書は、博士が東京市政調査会（以下、本会）顧問として後藤新平によって招聘された際に、東京市の職制および行政上の諸問題について託された4項目のうち最後の項目である市政問題、とりわけ窮迫している財政状況のなかで東京市長という立場でいかなる方策をとるべきかについて「東京市政問題我観概要」としてまとめたものである。世界的な実証的調査研究書としても評価が高い。

後藤は序文で、「政治の研究は、比較によりて発達す。そのこれを為す、時間的に比較するは、歴史なり。空間的に比較するは、外国の検討なり。都市行政の研究も、亦この範疇を出づること能はず。一国政治の研究が、外国人の手に成るは、吾人の屢々史上に目睹するところなり。」「博士は実に、天が東京市政を検討攻覈すべく、吾人に授けたる最上の適任者なり。」と述べて、市政研究の実証的な裏づけを持つためには外国人学者の協力を仰ぐことが必要と考え、著名な市政学者である博士をおいて他にないと考え日本へ招聘したのである。

博士は、1922（大正11）年9月の来日より約半年間滞在して全国主要都市の調査研究をおこなうかたわら、精力的に講演をするなどわが国における市政の科学的調査研究のための基礎を据えた。まえがきで「親愛なる後藤子爵」と題して本書を刊行するに至った経緯を次のように述べている。「第一は、日本の大学生及び主要都市の市民の間に、市政並びに一般行政に関し深甚なる興味を喚起するについて、助力をもとめられたことである。第二は、調査会を輔けて其の調査計画、図書館及び調査方法を編成することである。第三は、租税、課税物件評価及び交通といふ如き、具体的都市問題についての米国の実例を要約して、貴下並に市理事者に提示することである。最後に、貴下は、当分私が東京市長になったつもりで、東京市の市政問題に関する報告書を市民に提出し、『自由而又腹蔵なく』私の見解を披瀝することを求められたのである。本書は、貴下の着手されたる彼の興味あり意義ある事業に対し、私の参画せむとせる試みの記録である。」

本書作成にあたって博士は、「市政全般に亙る」ことに対して「各問題について極く大ざっぱに取扱ふ」、「浅薄の譏りを受くと同時に、専門家に対して具体的有益なる知識を与へ得ないといふ危険を冒す」と危惧した。しかし、日本の都市問題においてもっとも急務なことは、「市政問題に関する一般士の興味を普及し、その意義を彼等に徹底すること」また、「日本全国の都市研究者に対する入門書たらむことを期する」と述べて、東京および全国における都市研究者に対して市政問題の啓蒙と基礎的資料となることを期待したのである。

\*博士の仮名表記は、『アメリカ共和国』（（本館図書番号：OI—1365）凡例より博士の生前のご希望）

（柳原裕彦・市政専門図書館司書主幹）